自分の状況 うまく伝えられない

失語症の被災者 ケアを

何が起きているか把握が難しく、自分が困っていることさえうまく伝えられない――。失語症などでコミュニケーション上の障害がある、そんな人たちも東日本大震災で被災したはず。専門家らは「援助を求められずにいるのでは」と心配している。

「丁寧に説明、安心させて」 専門家

震災の6日後、仙台市の言語聴覚士、細川恵子さん(59)の携帯電話にメールが入った。

「寒いよ」。2年前まで勤めていた東北厚生年金病院で、リハビリを担当した40代の女性からだった。脳卒中の影響で失語症になったが、働いて自活することを望み、市内でひとり暮らし。そこを地震に襲われたという。

女性の家はまだ電気が来ておらず、近くの病院でおにぎりをもらって、家で1人で過ごしていた。助けを求められたと感じた細川さんは、自宅マンションまでバスで来るよう伝えた。すでに電気が復旧しており、食事を食べてもらったら、「うわー、温かい」と喜んだという。

失語症は、脳卒中や頭部外傷が原因で脳の言語中枢が損傷し、言葉がしゃべれなくなったり、相手の言葉がうまく理解できなくなったりする障害だ。国内に30万人以上いるとも言われる。

「彼女はメールが結構使えた。たどたどしいが、何とか話ができるのもよかった」と細川さん。失語症のほか、発音がうまくできない構音障害など、コミュニケーションが難しい言語聴覚障害を抱える人は被災地にもたくさんいるはずだが、「現状把握は難しい」という。

そんな人たちのコミュニケーションを助けるのが言語聴覚士だ。新潟県の長岡中央綜合病院で働く目黒文さんは2004年の中越地震当時、県言語聴覚士会の会長だった。大きな被害を受けた山古志からの避難者が集まる福祉避難所で、失語症の人たちはどう対応したらいいかわからない様子だったという。

「言語聴覚障害者は災害時にも自分の状況がよく理解できず、動けないまま不安を募らせている場合が多い。丁寧に状況を説明し、安心させてあげるのが大事だ」。避難所でも1日のスケジュールを示し、生活のリズムをつくるのが効果的という。

今回の震災では、言語聴覚障害者が置かれた状況はよく分かっておらず、直接支援するのも難しい状況だ。言語聴覚障害者に限らず、同じようにコミュニケーション上の障害がある自閉症や認知症の人も、環境が大きく変わったことで不安に襲われている場合が多いとみられる。

「はい・いいえ」の質問で対話

そこで専門家でなくても手助けできるようにと、言語聴覚士らでつくるNPO法人コミュニケーション・アシスト・ネットワーク(CAN)がサイト(http://www.we-can.or.jp/)に支援方法をまとめた。

失語症の人には「はい(うなずき)」か「いいえ(首振り)」で答えられる質問をする、といった具体的な方法を説明。そのほか自閉症や認知症、高次脳機能障害といった症状のある人についても支援方法を紹介している。摂食・嚥下障害の人への接し方や、絵文字を使ったコミュニケーションの方法も載せている。

杉本啓子・CAN副代表は「被災地の保健師や介護士らにぜひ、このサイトを活用してほしい」と話す。

(石村裕輔)

The Asahi Shimbun

失語症の人とのコミュニケーションの取り方

- 話しかけるときはゆっくり、はっきりと。一度にたくさん話さない
- 本人がうなずいた内容を再度、こうですね、とゆっくり確認する
- 文字や絵を示すと良い。漢字のほうがひらがなより分かることが多い
- 「あいうえお」の50音表は失語症の人には分かりにくい。原則使わない

※コミュニケーション・アシスト・ネットワークの「失語症の人への支援について」から一部を抜粋